

【68年5月／映画】

シネトラクトせよ！

須藤健太郎（訳・解題）

（首都大学東京）

シネトラクトとは何か？

それは2分44秒（つまり毎秒24コマで、30メートルの16ミリのフィルムリール）のサイレント映画であり、政治や社会やその他の主題を扱い、議論と行動を呼び起こすべく作られる。

われわれの思考と反発をシネトラクトによって表現してみよう！

なぜ？

反対する・提案する・衝撃をもたらす・情報を与える・尋問する・明言する・説得する・思考する・叫ぶ・笑う・告発する・耕作する——ために。

何を使って？

- ・一枚の壁、一台のカメラ、壁を照らす一個のランプ。
- ・いくつかの資料、写真、新聞、イラスト、ポスター、書籍など。フェルトペン、セロテープ、糊、柔らかい巻き尺、ストップウォッチ。
- ・いくつかのアイデア。

どうやって？

撮影する資料の順番（とその長さ）が肝要である。したがって、ちょっとしたシナリオもしくは作業プランが必要である。

単純なアイデアから出発し、そのアイデアを使用できる素材に合わせて映像に解体する。ただし、「最初の思いつき」を超えると同時に、過度に野心的な効果を望まないように注意する。文章（サイレント時代のように読みやすく美しい字幕による）は本質的なことにかぎる——もっとも簡潔なこと、もっとも明瞭なこと、もっとも強烈なことに。

撮影前に、ストップウォッチを手にしてテスト撮影をおこない、各撮影ショットの長さを決める。文章については、単純である。それは「ゆっくりと読む」時間になる。映像については、リズムを「感じる」必要がある。映像に特有のインパクトにしたがって、その先に来る映像と後に来る映像との造形的な関係を、そこにあてがわれる役割（情報・注釈・句読法・振動）を感じなければならない。連続した映像のつらなりは、言葉による言説とあるときは近くから、あるときは遠くから結びついているひとつの言説である。シネトラクトの衝撃とありうる効力が生まれるのは、こうしたもろもろの言説の多様性と戯れからである。

できればズームを使う。ただし、「ズームの効果」を狙ってではなく（それが必要不可欠となるきわめてまれな場合にとどめる）、カメラを動かさないままフレーミングの精度を高め（資料やその細部にはクローズアップ）、時間を稼ぐために。

シネトラクトは連続して撮影する（もしそれが可能なモデルのカメラなら、ひとコマずつ。もしくはストップウォッチを操作して）。映写の順番通りに、あいだに「白いコマ」が入ることのないように。通常、シネトラクトは編集なしで使われなければならない。ラボから出たらすぐに使えるよう、取り計らわねばならない。

重要事項

- ・それぞれのシネトラクトには、われわれが依頼を受け取りしだい割り当てる番号が付される。したがって、最初のショットは番号を示す字幕であることが望ましい。たとえば「シネトラクト55番」といったように。
- ・ネガフィルムXXを使用するのが好ましい。
- ・これまでは編集を撤廃し、写真と資料を撮影する技法を選んできた。それなら、まったく確実に仕上げられるからである。むろん、動画場面を使うことも思い描いてはいるが、その際もネガは「ラボから出たらすぐに使える」必要があることを忘れてはならない。つまり、撮影の失敗に気付いたときは、順番通りに、別の

フィルムリールに、完璧な撮影ができるまで、すべてをやり直さなければならない。ちなみに、いい教材がある。テレビの生放送である。

- ・カメラからフィルムを取り出す前に、フィルムリールに張る「要現像」のラベルを用意すること。
- ・フィルムをわれわれに送る際、そのシネトラクトの要約を添付するのが好ましい。
- ・現像とプリント制作はわれわれが責任を持つ。
- ・シネトラクトの作者たちは、この仕事を素人監督の活動とみなし、営利目的ではないことに同意している。金銭的な援助があっても、それはさらにシネトラクトを作るためにしか使われない。

« Cinétractez! »

訳者解題

1968年5月に映画は何をしたか。映画は匿名のなかに、集団のなかに、シネトラクトの実践に身を捧げた。ここに訳出したのは、シネトラクトへの参加を呼びかけるタイプ原稿のアジビラであり、その作り方が記載されたマニュアルである。文中で大文字の箇所をゴシック体ボールドにし、イタリック体の箇所には傍点を付した。

シネトラクトとはここで説明されているように、白黒でサイレントのわずか数分の短篇であり、基本的には静止画のみで構成される。当時は200本以上のシネトラクトが作られたと主張する人もいるし、100本ほどだったと回想する人もいる。2018年、68年5月の50周年を記念して、シネマテーク・フランセーズとISKRAによって40本あまりがデジタル化された。もとより、インターネット上ではDérives.tvなどを通してそのいくつものが流通している。興味のある向きはぜひともご覧いただきたい (<http://derives.tv/cine-tracts/>)。

シネトラクトの冒険に後年多くの関心が寄せられるようになったのは、匿名を旨とした活動であることを考えると逆説的なのだが、アラン・レネやジャン＝リュック・ゴダールやウィリアム・クラインなど著名な監督が参加していたからだろう。だがシネトラクトが再評価される時、そこにはきまってクリス・マルケルへの敬

意が込められている。匿名と集団の影で、その実すべてを組織していたのがマルケルである。映画によるアジビラである「シネトラクト」という企画は、そもそも彼の発案によるものといわれている。

クリス・マルケルは1967年の『ベトナムから遠く離れて』以来、集団による映画製作の方法を探っていった。『ベトナムから遠く離れて』のオープニング・クレジットには総勢58名の名前が記載されるが（マルケル自身の名は54番目）、それに続いて「そしてその他多くの技術者、助手、友人たちが1967年にこの映画を撮った。自分たちの仕事の実践をとおして、侵略と闘うベトナム人民との連帯を表明するために」との字幕が付けられている。

『ベトナムから遠く離れて』は、1967年10月、フランス東部ブザンソンでロディアセタ社の労働者の前で上映された。フランスでの初上映になる。当時、マルケルはブザンソンの労働者たちと強い関係を結んでいたからである。

1967年3月、マルケルはブザンソンにある文化センターから手紙を受け取り、さまざま現地に駆けつけたのだった。その地では、ロディアセタ社の工場労働者たちが大規模なストライキを敢行していた。マルケルは運動を支持するばかりか、マリオ・マレの協力を得てストライキに取材した『また、近いうちに』（1967年）を撮った。そしてさらに、撮影に参加した労働者や文化センターの主宰者らのために、パリから撮影監督や録音技師、編集者などの技術者を集めてアトリエを開き、映画製作のノウハウをブザンソンの住民たちに伝えたのである。

労働者たちはいま映画監督にカメラを向けられる被写体であることをやめ、自分たちによって自分たちのために映画を撮る映画製作者集団を形成する。彼らはマルケルの提案で「メドヴェトキン集団」と名乗ることになる。1967年、マルケルはライプツィヒの映画祭でソ連の映画監督アレクサンドル・メドヴェトキンと出会い、その『幸福』（1934年）に魅了されていた。また、メドヴェトキンが1930年代に実践していた「映画＝列車」は彼らの模範となった。メドヴェトキンは1932年、車庫内に撮影スタジオ、フィルムの現像設備、編集室などを設置した「映画＝列車」を作り、それに乗ってソヴィエト各地の工場や農場に赴いては映画を製作し、労働者や農民に見せるという冒険に打ち込んだのだった。

そして、1968年5月初旬。マルケルは仲間たちとシネトラクトを開始した。

フランス映画界では2月に生じた「ラングロワ事件」を受け、反体制の機運が高

まっていた。文化大臣アンドレ・マルローがシネマテーク・フランセーズの館長アンリ・ラングロワに解雇を言い渡し、映画人による大々的な反対運動が巻き起こったのだ。また学生運動の激化にともない、5月になるとIDHEC（高等映画学院）の学生たちがストライキに突入り、カルチュ・ラタンの大学生らとともに学校を占拠した。映画技術者組合もまた無期限ストライキを呼びかけるなど、映画・テレビ業界は機能停止状態に陥った。5月17日、映画三部会が結成されると、そこには監督、プロデューサー、俳優、配給業者、批評家など、有名無名を問わずあらゆる職種の映画人たちが集まり、その数は1300人にも及んだ。映画三部会は雑誌『映画は蜂起する』をテラン・ヴァーグ社から刊行し、同誌は計3号を数えた。「シネトラクト」というアイデアはまさにこのような文脈のなかで生み出され、既存の製作体制にも既存の美学にもよらない映画のあり方を示したのである。

「ラボから出たらすぐに使える」シネトラクトでは、なにより速度が重視される。たいていはひと晩で、遅くとも1日以内で撮り終えられた。撮影はパリ6区のリトレ通りの写真スタジオでおこなわれ、そこはカーペットが敷かれているほかは何もない広大な空間だった。多くの写真や資料類が集められており、クリス・マルケルやウィリアム・クラインをはじめ、ブルーノ・バルベイ、マルク・リブー、ジル・カロンなどによる写真が、誰でも自由に使えるようにと床に積まれていた。静止画、16ミリ、モノクロ、サイレント、そして1リールというシネトラクトのルールは、低予算ですばやく仕上げるために選ばれた効率重視の方法論に由来するのだろう。だが、そこにはもちろん新たな映画を模索する造形面での意図もあったはずだ。静止画による映画といえば、『ラ・ジュテ』（1962年）や『もしラクダを4頭持っていたら』（1966年）でマルケルが自家薬籠中のものとしていた手法である。

ジャン＝フランソワ・ダルスによれば、第1回目の上映は5月の終わりごろに開かれ、そのときには10～15本程度が見せられた。シネトラクトはおもにシネクラブを通してたちまちフランス全土に流通し、とりわけ工場では休憩時間になると上映されて議論を促した。インゲール・ソルヴォランが回想するには、シネトラクトの運動は6～7月にいったん終わり、ふたたび1969～70年に始められたが、1972年ごろまでずっと上映され続けたという。

『ベトナムから遠く離れて』の製作に、ブザンソンのメドヴェトキン集団のアトリエに、そしてシネトラクトの実践に参加したマルケルとその仲間たちは、1968

年11月、SLONを正式に設立することになる。68年5月を受けて生まれた多くの団体とは異なり、なんらかのイデオロギーには従わないことを信条とした。1971年に起草されたマニフェストによれば、SLONの作品リストは「存在するはずのなかった映画」からなる。メドヴェトキン集団の製作活動を支えるほか、1934年に製作されたメドヴェトキンの『幸福』のフランス語版を製作・配給したり、チリの映画作家パトリシオ・グスマンに手を差しのべるなど、SLONは活動の幅を広げていく。1974年にISKRAと名称を変え、現在もその試みは引き継がれている (<http://www.iskrafilms.com>)。

1977年、マルケルは政治の季節を総括するかのように、60～70年代に世界各国で撮影されたフッテージをつなぎ合わせた長篇大作『空気の底は赤い』を完成させた。エンド・クレジットに流れるのは、次のような文章である。「この映画の真の作者は無数のカメラマン、録音技師、証人、戦闘員、その仕事をたえず〈権力〉の仕事に対立させてきた人々である。われわれに記憶なしであることを望む〈権力〉に」。

集団のなかで人々は匿名になる。そこに浮かび上がるのは、個人に帰されることのない共通した身振りである。『空気の底は赤い』は、その冒頭でS・M・エイゼンシュテインの『戦艦ポチョムキン』(1925年)と60～70年代の映像とをやつぎばやにつないでいく。時代も地域も越えて、人々は同じ身振りを繰り返している。殉教者を嘆き悲しみ、警察の暴力から逃げ、ある者は血に塗れ、ある者は斃れた同志を抱きかかえ、ある者は声をかぎりに訴える。そして、こぶしを強く握りしめては突き上げる。権力と体制に反抗する人々が、同じ身振りをとおして連帯させられる。

『空気の底は赤い』冒頭のモンタージュを見ていると、そこにシネトラクトで使われた数々の写真が想像のなかで結びついていく。シネトラクトには、多くのこぶしが天に向かって突き上げられるのを見ることができた。『フィルム＝トラクト R106番』——「シネトラクト (cinétract)」はときに「シネ＝トラクト (ciné-tract)」や「フィルム＝トラクト (film-tract)」と記される——では、冒頭の番号を示すショットが動画で撮影されている。クローズアップで捉えられた手のひらに「フィルム＝トラクト」の文字が見えるかと思うや、開かれた手のひらはゆっくりと閉じながらこぶしとなり、くると向きを変えると、手の甲には「R106」の番号が記されている。映画三部会による雑誌『映画は蜂起する』の表紙にも、強く握りしめられたこぶしのイラストが描かれていた。

はたして、現在でもこのこぶしを引き継ぐことができるだろうか。匿名の集団の一員となり、反対し、提案し、衝撃をもたらし、情報を与え、尋問し、明言し、説得し、思考し、叫び、笑い、告発し、耕作するために。誰もが容易に撮影ができ、誰もが気軽に映像を流通させることのできる現在にあって、「シネトラクトせよ！」の呼びかけに答えるなら、方法論も形態も戦略も変わることになるだろう。だが、やはり必要なのは、われわれに記憶なしであることを望む権力に反抗を示し、歴史につらなる同じ身振りを繰り返すことである。権力がこちらに銃を向けてくるのなら、われわれはカメラで対峙するまでだ。

参考文献

Esprit, n° 444, dossier « Les engagements de Chris Marker », mai 2018.

Raymond Bellour, Jean-Michel Frodon et Christine Van Assche (éd.), *Chris Marker*, Cinémathèque française, 2018.

Nicole Brenez et Christian Lebrat (éd.), *Jeune, dure et pure ! Une histoire du cinéma d'avant-garde et expérimental en France*, Cinémathèque française/Manzotta, 2001.

Judith Revault d'Allonnes, « Une brève histoire orale des ciné-tracts : Entretien avec Jean-François Dars, Anne Papillault, Inger Servolin », *Débordements* [en ligne], le 20 janvier 2014, < <http://debordements.fr/Jean-Francois-Dars-Anne-Papillault-Inger-Servolin> >, consulté le 23 janvier 2019.

Jean-François Dars, « Boîtes à images », in Vincent Jacques (dir.), *Chris.Marker. Photographie*, Éditions Créaphis, 2018, pp. 69-77.

Catherine Lupton, *Chris Marker. Memories of the Future*, Reaktion Books, 2005.

Catherine Roudé, *Le cinéma militant à l'heure des collectifs. Slon et Iskra dans la France de l'après-1968*, Presses universitaires de Rennes, coll. « Le Spectaculaire », 2017.

港千尋 (監) 『クリス・マルケル——遊動と闘争のシネアスト』 森話社、2014年。

クリスティン・ロス 『68年5月とその後——反乱の記憶・表象・現在』 箱田徹訳、航思社、2014年。